

子どもの心の発達を探る



人間科学部心理学科講師
池田彩夏

いけだ あやか

↑生田2号館前にて

京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）。専門は発達心理学。特に言語発達、社会性・社会的認知の発達に興味を持って研究をしています。主著：Ikeda, A., Kobayashi, T., & Itakura, S. (2018). Sensitivity to linguistic register in 20-month-olds: Understanding the register-listener relationship and its abstract rules. *Plos ONE*, 13(4): e0195214. Ikeda, A., Okumura, Y., Kobayashi, T., & Itakura, S. (2018). Children passively allow other's rule violations in cooperative situations. *Scientific Reports*, 8:6843. など。

■ 自己紹介：私の研究歴ダイジェスト ■

遡ること十数年前、私は「ヒトはどのように言葉を理解し、話せるようになるのだろうか」という漠然とした問いを胸に、大学へと足を踏み入れました。

ところが、事態は単純ではありません。言語獲得は様々な学問分野からのアプローチが可能なトピックです。言語学か、心理学か、はたまたチンパンジーなど、ヒト以外の動物種を対象に研究を行う比較認知科学なのか。どの専攻に進むべきか、研究室訪問をしながら色々考えた結果、自分の興味は「言葉を学ぶ主体であるヒトである」という結論に至り、乳幼児を対象に、その心の発達を実証的に検討している、発達科学の研究室に進むことにしました。

とはいえ、先行研究の知見が豊富な言語獲得研究において「具体的に何を検討したいのか？」と言われると、なかなか決まらず、卒業論文は全く別のテーマで書きました。その後も紆余曲折があり、最終的に言語レジスターと呼ばれる、相手によって話し方を使い分けること（例えば目上の人には敬語を使い、親しい人には

砕けた話し方をしますよね）を乳幼児がどのような発達プロセスで理解しているのかを検討したり、養育者が子どもに話しかける時に、格助詞がどの程度脱落するのかを調べたりして、学位を取得しました。

そして、言語発達の研究と並行して行っていたのが、子どもの社会性の発達の検討です。当時（そして今も）、発達科学・発達心理学の研究報告では、赤ちゃんや子どもが「いい子である」とやたら持て囃されていました。いい子であると実証的に示されていること自体は否定しませんが、いい面ばかり取り上げる風潮に違和感を覚えた私は、研究室の先輩と一緒に、子どもは結構計算高いのだ、ということを示す研究に着手しました。

その結果、子どもは他者が自分に対して持つかもしれない評価の内容に応じてその振る舞いを変えていることや、協力行動において、パートナーのルール違反で自分に利益がもたらされる時には、パートナーのルール違反を黙っていることがわかりました。子どもって、したたかですよね。そんなこんなで合間にフリーター生活や研究員生活を挟みつつ、専修大学で教鞭をとることになりました。

専修大学での子ども研究の実施

さあ、新天地。まずは、どうやって実験環境を整えるのか、という課題に挑むことになりました。今までは立派な研究設備が整い、調査協力者募集の制度も確立した環境で実験を行わせていただいていたため、ゼロから環境を整えるのは初めての経験です。

ところで皆さまは、大学において子どもを対象とした研究がどのように行われているか、ご存知でしょうか。子ども対象の研究は、主に2つの方法で実施されています。1つ目は、研究者が幼稚園や保育園、協力者さんのご自宅に訪問して調査を行わせていただく方法です。この方法では、お子さんが普段通りの環境で緊張せずに調査参加できるというメリットがあります。ところが、特殊な環境の設定が必要な調査や、訪問先に運び入れることが困難な機材を用いた調査など、幼稚園やご自宅に訪問して調査を行うことが適さない研究もあります。そのため、調査協力者さんに大学の実験室に来ていただいて調査に参加してもらうという方法をとっている研究室も多いです。

例に漏れず、私も大学で実施する調査に参加していただけるよう、環境を整えはじめたその矢先、新型コロナウイルス感染症の拡大に見舞われます。典型的な心理学の実験は、検討したい事象に余計な影響が入らないよう、統制された実験室環境下での実施が望まれます。つまり、調査協力者に実験室に来てもらうことが重要なのです。これが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって難しくなりました。では、実験を止めるのか?と言われると、もちろんそんなことはなく、心理学者はみな、対応方法を様々に模索することとなりました。

とはいえ、ラッキーなことに、新型コロナウイルス感染症の拡大前からオンラインで発達心理学の研究をする試みが細々と行われていました。オンラインで行われた研究の論文を読んだり、知人に参考になりそうな情報を聞いたり、他大学のラボのHPや学会の掲示板を調べたりしながら、うまく工夫をすれば、オンラインでもデータが取れそうだという結論に至りました。

そこで手始めに、子育て中の知人に協力をお願いして、どのように課題を進めれば子どもに課題を理解してもらえるのかを、ゼミの学生と一緒に検討しました。数回の練習を終えるころには、オンライン実験の特殊性(子どもが指差しをしても実験者にはその対象が見えなかったり、実験者がこそあど言葉を使うと意図を伝えにくいことなど)をなんとか克服し、うまく実験を進められそうだ、という手応えを感じていました。

そして、2020年度(そして2021年度も)のゼミ生の卒論実験及び私自身の研究は、オンライン実験で進めることにしました。ところが、ここでさらなる課題が立ちほだかります。

課題とは、研究協力者募集です。研究室としての認知度がないので、なかなか子ども調査の存在を知ってもらえない。協力者募集用のHPを作成し、フリーペーパーや市のHPに広告を出し、チラシを配布し、SNSのアカウントを作成し…。参加いただいた皆さまには心からの感謝しかありませんが、ゼミ生が面白いテーマで研究を進めているのに、参加者が十分に集まらず、議論をしにくい状態で卒論を書き上げてもらうことになってしまったのは、心残りです。

もし皆さまの周りに、調査に興味を持っていただけそうなお子さま、保護者さまがいらっしゃいましたら、ぜひ専修大学発達心理学研究室の子ども研究員を広めていただけると嬉しいです。コロナ禍によってやむを得ず始まったオンライン調査ではあるものの、大学周辺にお住まいでない方にも調査に参加していただけるようになったのは、災い転じて福となす、といったところで、全国各地、様々な場所からのご参加、大歓迎です。

ちなみに、今私が行っている研究は、何もせずに傍観するという行動を、子どもがどのように評価するのか、というものです。他にも、ゼミ生が面白い研究の実施を準備しているところです。最終的に宣伝になってしまいましたが、最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

子ども研究員(専修大学発達心理学研究室)募集ページは右のQRコードよりアクセスしてください。今年の夏は、向ヶ丘遊園駅前のサテライトキャンパスで子ども調査イベントを実施する予定です。



↑子ども調査の報告書を作成し、調査に参加いただいた方にお送りしています。